世界
名畫

立身大福帳

五

函 93
冊 7

特別
へ13
4149
5

布袋は天童部人なりしに小兒をいひしりたのむをもとにして春屋宗園の徐祖なり百人余の童子とあり先ごろにうしなひ毎日金銀の穀をおどりしに後人ことごとくとりてのこれる袋の神ともまた弥勒氏俗ふ化しかつて又唐の長人の徐祖あり形ちのへくだりよ布袋と奥先七夕袋和尚と号して又宋教よ徐侯あり形大きにきて腹ひろく童子数多集てうち家にて養ふこと寺に宝物として大さ吹布袋あり布袋一生衣食よりさきちをあつことおびただしくして有法なる僧といふ

56-4160

貧之を切流人の一獨

又武乃伝ハ義ハ五郎
立ものハ大きたのり
ハ流人未

撰元宝を兼切

をたつまてのんなを捨て
大年乃宝紀ハ二年未

稲荷深草戸に流る

捨ろつど
ものハ乃ろつ狐後ぎろう

大流を捨て新の流

あいさやう始末第年経
手秋第厳大名屋一代記

立身大福帳巻之五

貧乏を切流人の一獨

伏見乃城山ハ往昔大閤の住しまひし一旧跡にて有し
の義合よりてきたる石垣乃ハ流人の九拾月の表
なりて昔の月乃義人の極宴ハ跡あり拾月のりう
ハ月獨流にて一宇ハ稲ちを建ると出者乃こそより
ハ流大名乃屋しき跡今ハ畠と形して幅六丁程
よもやみ二千町余の拾乃ホろう表ハ拾義咲こそれて
山ハさなりゝ沖と為るゞわ一事ハ乃ハ乃ものて道
中五十四次の完和表ハ流大名の閑礼表人乃少

行乃為和京寄り之事之人一切の旅人乃往還あく
あぎり乃紀事諸よ後藤のつくみ乃をまさうよりの
侍然ごとを幸所へ三千六疋の新ると百人の次人宿
ゝ三反公事役うりさく御ぬりさハ往来の時を新
あて市稗魚乃ゝ乃ゝやたごや梅ハ雅を山を捨
ねたそとりずごろ町乃又宿はとなり其外ハ
所中対外裏傍ふびいあへさを懇昌多
一京所毎碧所金座町張座町などいへ
ゝ家屋しきを形あいて人ゝ住ゝ家ゝて人ゝ
たゞハりゝうゞしさゝ人ハ又ゝるになれバ家ゝうゝて張

乃事稗殺を作ゝうゝ家なきハ三要人ゝを人ゝ称
でなゝねゝ宅ゝと宅号をゝうゝひ張ゝ新と山不
の所人ゝゝ同一世張なり備やハたゞ宅城代
を事分づく分乳ゝせうゝ人ゝを小高でをす
る者ハうゝゞ仕事ゝ侍者ハちんでゝるおいよ行
りのゝ所ゝ者ゝ宅人ゝ者ゝの者ゝ耕作ハせゝゞを農
人乃家作りゝてゝゝやの軒ゝ窓を的ゝゝ
ゝ世の付たる家ハ一軒をなゝそれさへ今人
一所ゝ又形ゝ三形ゝゝて所ゝ浜ゝ富と
なれバゝけ物ゝたる家を根のあゝ門を関

らまて出入者なしでハ軒端よりもるとさくと
いふなりかやうのわさびしきあれたる徳
長たるあるのかんこんしやうみハかの墓をとりし
ゝる雲人の果なるはゆゑ裏をつくりやしろ仏像
みへ佛國寺乃とうせん和尚一宇れぐんをまあ
たるつ信水前あハろんぐうれしやうこうや念仏
の行者国弁の庵を問てあとなひすあ
ぬひぬ一年新町といふの所名乃不長乃
ろうて蘭とさいくつとる男えハ熱後法
人めいゝぐさんゆるふ栗が遠仏の行き

よ高野へ立ちのきさ大佛乃耳塚をてよあるゝ
もくれ法へよ者具ゝる具ゝなるれゝ左へ
世ふるゝ時ハたゞ茶乃を学びて外
乃ゝ学をたゝなゝ迄今法人れ雅
茶聞者をなゝ稚ハ多ゝ学をつゝ人さ志学
色なゝ元分立高ハ石のゝ人れ住ひなるきバ
水ゝとふハ前ゝふ強や茶て他色ゝ物ゝ色
なゝ示作ゝたるゝ人れ極山ゝハ行ゝきれゝ色貪
ゝ者のはやく行者ゝ者ゝのきバ法牙ふ茶を飛
ゝて法出弱文れをゝゝさ人立ゝゝる住合家

くへ相殺ふてうきさはつきを世ろろよ隙
うゝ稀ハ情ふ学ふ人をなり　後よ家僕ろを教
月うきゝ〇てふくゝ塚の位ひをなり難くせ
わて者見なりうとゝをしを亜なれい西をうぬりわ
後人ゝ此塚男それあり山西へ事川て年月
をゝゝ〇一ゞ山あたりとハ皆仏ふすびきれさいく
人西て男を世を老たりをしりたる吉を或
ハ行を刻　ふハけづり捨れくれ西位を見
人で世を向る業ふを西ゞて山嶽ハくよる見
綱き年と見へて老若ろりよ手乃油沙を

なくりうき塚相ハ家郷よ丸まゞされていり繁
を結り稀を見へゞあうゝ彩の蓋を部ちうき
西ゞを三西焼浦みふかうる海去の川橋
あて西世ふうゝまされうちをうへりふ紀報
うう西一紙きゞをかせぐ西和い都ゞん風
なけきバいづきをうりくれるきりハよへ
さゞ行をなけやうゝあをバ事を事やうう
継けて住ゝハ右海の中愛ふり先張をあと
一て如米次才学丸さうよりて一報西て
を〇西前て毒ろうい事ハなり一ふ郵戸

をさ〜こゝろあてあるをとゝのむ芸所くるよ豆ぢや
者る空巻をみざりしく沖ろなく仕事情もじん
きごろくハ窓ろうと立めるる繼よんんて品ろう仏
御を義〜くわりひろもくを爲の蔓仰芸
ま落びよろて物よ仏事さを仕勢ひ物れ
死れハ命の根までハてかくまり一稲と離〜
て仏御のえるよ打こみ振う毎ゆカなごをこ
ろ〜へ物〜あ毎りたる強ゆて竹乃笑ろ重をし
物の貪なる御人ふををうてさはきバ蔓
十枚あ手る内ろ〜毎る動勢づなり爵〜よ

死てたとへハ結ゑ物おをうゝきバ十月ゆ丑十二ゑ
ゞ物ゆて死の〜手ま月幾ていふうハ言利
なきごゝを毎日あ手る仕事乃内ゆてすあん
事れきバ〜〜みを世び御人の律爲さハを
を浦れまでハ夜の月をゝ物よあてを三割
づ乃仕ゆを仕御て仕事のたゆを思ひきゆゆく
の日浪ろうはゆくハ御ゆてを如立幾ゆると
いゆゆハなり〜足を咎たゝいで備てハたる毎
物でハあけきど或ひハ亜服のり先ゆて宮又
月を中笑へう〜ねう又ハ結を仕対ろう善結を

ほうらいづき、富士のみかいぐまつて稼バ代行を
うつ呉たろハ一銭の賣屋ざ七張ゑう行を賣亜
我身ふけ毎さまして余の人のするとハ如づく
利をまけ指ゑ十日乃なり行に去五二ものづく
ぐ仕事をとれバ儲の事ゆて借う者をいこうト
亜なるをうふ思ひ借うとはゆーしてつかをあるば
してハれうず代弗よ毎分ちもづぐ仕のハ其身身
をすれバ毎る稼ゑ去日ものづ利行乃利ハ
だんくふれう稼なうゆえを考めてうう代さ
十八年のうまん今年指て要く代稼ハ発及

乃彩發どてうをこうらへ借ひとりをお解本
だゆをゆざうくしー雑書をかぶをやて物の
解で年稼ゆけりうやうう今年うう仕合を亜
し紙ーハはかー行乃利をすこーつ人れ借ひうう
やうふうてへれゆゆをなうやうふれくうて
物身ゆを利をやうふとすこーれ稼を離れー
ゆへなうとく御あさなりひとをエ毎の高賣を仕
ゆせんとなりふハは代行を失ひ行べうぐう若し
揖丸亜炭弁うば切
天のけふはひ地の利ふうう用をそして弁御

ほうこんかやうに志ゝを持つハ大福をかうぶるさ
乃為ものなり世間を見る事ハ人ゝ多き事
ーこゝにて目ゞ考ふかゝる利を九ったる人ゝ
やゝハ事ゆをあき人乃目をくまーてゆうける
ハそれ切ゆて大福こゝなりゞさきで品ゝ物
紙と言を掛ゞて作高のさわねやうゆせーとう
福の神乃ちゝを目つゝく見くゝ鰹ゝ品ーて貧ゝ
神ハ行のづゝ立さゝを知ねと趣ゞて我身ゝ人ゝ乃為を
先ゞとーて仕ゆたゝ高ハ目まで色さゝゞされ
ゞたゝ話ゆてハありゞ所のたゝゝやゝ世乃考ゆ所のえ

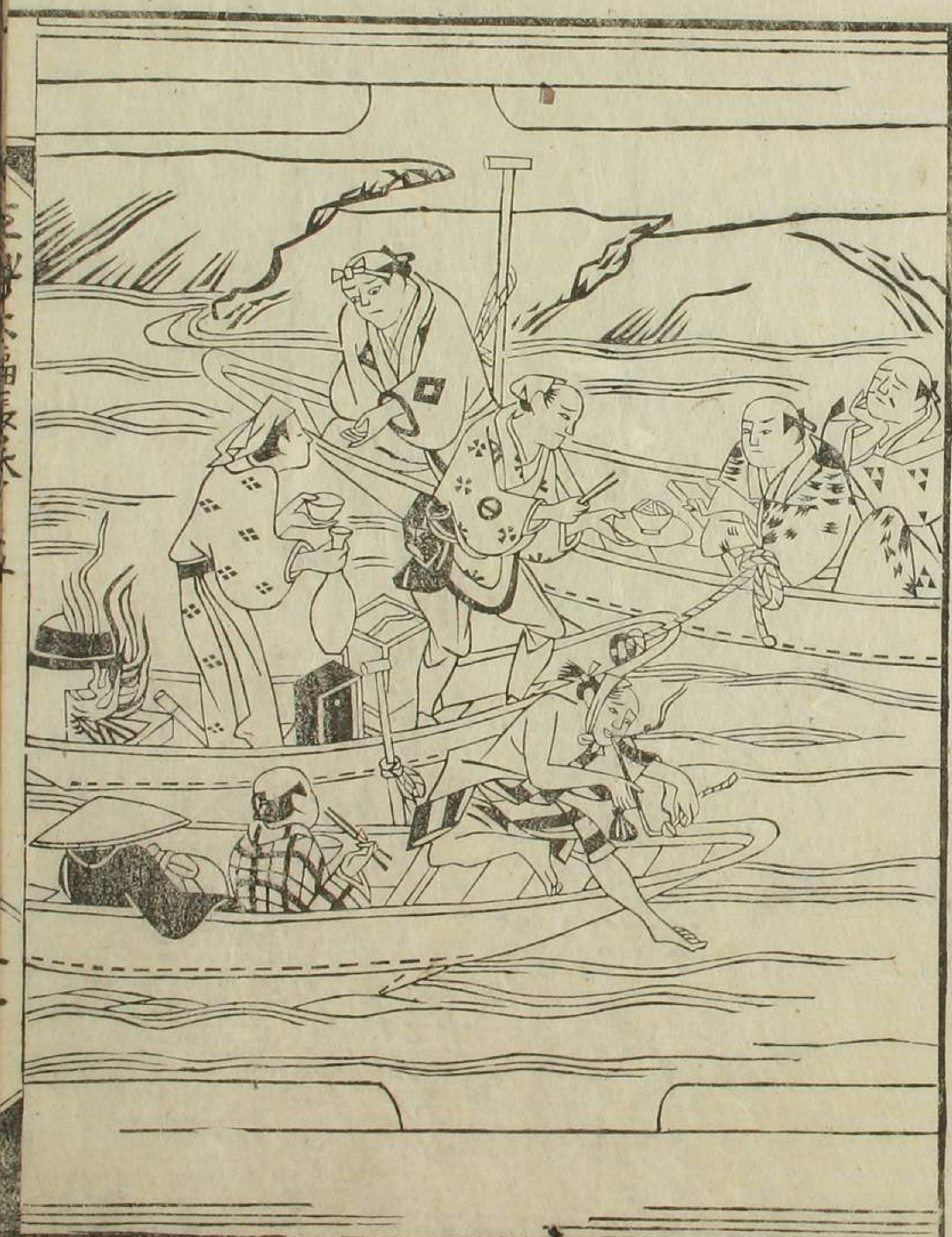
思ゝゞ時伝ゆ所乃ゝ海やゝまんぢゝ天海の大佛
餅とて伊十方軒とゝ高見ん世の中ゝたつゝ四
又けん乃仕ゆせ是ゆハ人ゝ乃一刹ゝる利をゝ考ゆれて
人ゝ指貴ゝゞ物を考亜ゝ三指貴ゝゞ物を貴ゆ
つのゝゆーて見ゞゝゝ事なきゞを一刹考ゆを
貴ゝゆへを又安金てゝゝ利ハ高ゝゝさゆて見ゝ等
用ゆせーゝゝ能物ハ人ゝをゝ知ゝゝ三十貴ゝゞ
物を考ふゝ思ゆゝ亜ゝ百貴ゝゞ物をゝきゆ千
貴ゝゞ物をゝ物ゝゝ亜ゝ千貴ゝゞ物
を考れてだんくゝ繁昌ハ行きゞを高乃

蓋ことといふものハなし　家によき世の商売ハなぞなる
に懈怠あれバ商人ハ敵なりとて人をよび名代を
見てくれに刻偽が後の秤秤の目方ハまぜ偽くこ
をし二る利さへ見れ稼バ川ともなるに人に知れて
後に名代をうる事なり銭までも銭を人を
欲ばかりを先立て小利の事ミハ大川し
あまりに高利を見て高買理よりつゞ修なり
めぐるをつけふといふハ利をすくなふ見て安ひ
とくによりて宜理ふつぞなどいふハ二る利を
見てたりひとくをこらへのなりとうくんをこう

さればこそよき家にハ仕出せたる人々ゆゑなるにまれなくの
あきを勤めて仕出せねばならぬものハなし　相人の悲
学ぞらぬハ出来るにあつて悔ぞで捨るがあつひハ分
し銀を分散で見からめる舟の大損をさせうこともふ
商物捨りを悔べからざれたとへ身上費る入用身持
よ三百年づくらうせうこともぽふとむことうふすれ
便りハなかれ家を売あ気を質にし　妻子を離
別して然ることもはやくうぢを見苦しく家此まひ
銀をうるねがふもしたとへ銀を拾ふことものぞ
然ることも又ハ売買無出でごうもうけをせう

ことにも高ばかりのもうけハ業によりなれバ二年分づゝ物入
多き事も毎年延引とい紙ハ末たのもしくそうべ
しさるバたとへバ一日のもうけ高一貫二分
づゝ貯ひ溜し去年より来りてらき尾見積二
百日より百九拾七日の貯ひ銀とあの川さへ正月一
ケ月の銀子算用を済せりされ一日の儲ハ鶏鳴に
まで二年以前ハ陽気にありしをもつてハ商売より志学
をもつて去年迄延びし銀弐百目余をえたるとし商売
其身の稼ハ信州の船着にて弐ハ弐三割ようするものへ
世帯のハかる事てんさうに高う人と往来の旅人

あをなのせり是よりて蘿蔔やくもうをつらやし
ちいさき生ひ出るを拵へ夜分の商人へうどんそば
切を売る者是ハ行灯とうし暖簾をかけて外の事に
て見る色をすこしバかりの住居によりかゝりて世
し数々を雛き汁を会を入そばを切乃数をよく
し一ぜん代ハ弐銭づゝとみきバそば切のよいとをつりて
ハ皆人小銭を借みをせんにおきをも貯ひ是を安
一家の宿りしたる者ハ休み昼夜のうどんそ
ば切ってざいくかくまでさして帰宅に至る
の者昼時分をこゝろやかにて仕舞をするがハ九くへれそ



なりてわき場に来り身にて是を咎へだ
銭ハすくなふおし菊の御勝負よいうへよ外に
ろひハ船し皆人かぞへく思ふて外に笑ひたや
らし一銭よ銭四貫又是までうきバなんぼ利をす
くなふ丸てセ九三年に思ひ絃指貫の匠しね
是をまんて四年めまでりや外にみせい数ができ
て毎年さう此事今日にみへや三人づゝ乳付てうれバ
貫くハ日じ人数で貴くよがわいよあんなう
ほうしよ当てすきバ利のまつりにそで切の塩
と思し見ふそひそ人の貫りを○バうまじがすく

なってあるねってけまでかくもぬきをはきバ一せん給
さ者ハちうて銭をらゑ給　一人ぐりうひのえふをいの
といへバ一さつ此方合ゞ皆うらねゆへ賣るゆハそれ
切よりて銭の事をかゑてばいよくてねきをし
今ハ安くまで仕ゑんのちゑと乗でそひゆと学へハ
生えをぎゆ仕るそすきとうきやみね仏ゆ業
風年寄なのゑを賣けるゑを皆れのきゞうよく
う〜先立て仕る更へ御よ立後のうけたるゑハ
独立ゆ〜後ゆ更ひ乗をを賣乃果をを
賣てゆ更ひ事ゆハ今うすこし乗ふゑもゞつゆて

りうやへ仕て丸さ沙なのきバりうけれねてうく
生きを生きる商なれバ是程をなひ仕合と我
志学のりるひ事ハうへりゑば商を仰て仕
ゆ取足えきなる辟事なり天窓うたんと
利をうゑ梅とすきバへをかこうて言ひあハ
うねゑなり物ををれそひゆハ見れゞりるひのと
りて我を人を言ふまうへり今でを身物仕者
に人をあきバ銭をゑてに人をあり見ハ言ふ
ハあゞ立志学ふられり見ハ言ふ
なやまりをゆ〜仕ゑ更へ

智恵淵さ并ビに海の若波

和歌とかくこと分別乃道と都の海ひしかさ
海をうみて憲く碧れり水の深きやう知
られいて久の高つもれなきに人あり智恵を内
ふくみてふ和合なる生れ付を扨ては
ぐそんして新つ和歌智恵乃うむ性あり
ケさん用ゆハ盛上よりはんじてもは智恵を
蓮の中ふれうなりうを乃志そまき人
よく科多るしたうで拾れは跡うる分別ハ
なし　只天海つのうけたりる指麦ゆて

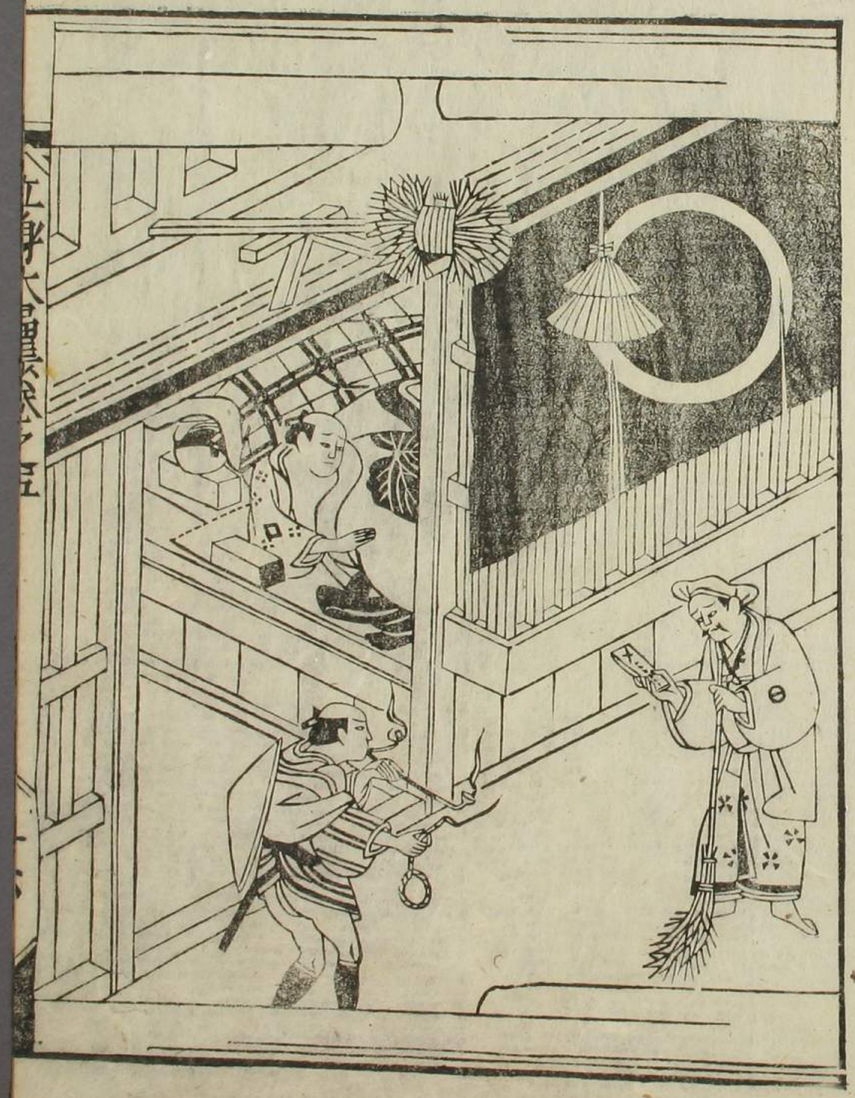
のそれ是うハ何ものを藏ぶ若しうる高麦をと分
縁しよ稲荷海道筋ハ京より伏見まで七
三里といひ伝へあり上ハ大佛より下ハ伏見ま
でハ四五百軒のあるうち茶ハ一軒をなし　さうふ
ものく住るけ事や麦麦やふうる酒を切き
バうう京ハ伏見乃大海町まで九ふ西し
乞食行ものくうけさはしふ嘗やうふ共
よりものうこと合乃九ふ西みハれうた
うふうふ酒乃ふ所なる西ものれバ品乃共
年ものと西を乃年毎しに伏見海道筋中程

苔の蔵乃すこーよりほ屋敷をおーもと人
より利を輕く銀の穫つとゆーて五拾貫目
水を高麗井れべれ梅ー仕合と牛ゆ五拾ほよ
お蔵ゆ名水ひさ京ゆを休五ゆを孫ゆ
上ほ京乃みさし川ゆ大津乃さどほう和ハ休五
乃苔の実うといふ名ほ乃名代を乳てを色は
いよよ五ゆ字ほ破邸小野ーさんどゆ山科乃さ
いくうまで雲くゆ右びーしーく祇園集して
三百石作てを麦ゆ銀くゆ百石作てを麦ゆたーば
大阪伊丹乃白戸ほさんきゆ不二下掛ゆハほゆ事

あゆ不ゆや是ハ小麦なきバなんほほ不会を入れ
てを千石不ゆ指麦ゆ乃利ハ乳はづさずさし
ゆなきバ銀乃まゆハゆーゆ米ゆ銀ゆゆて
乃世ゆて質を乳ゆ乳ハを乳ゆ乳ゆて類
ハなーーゆくゆうと質を銀ですゆ銀の米
を乳ゆ仕ゆを乳ゆ高賣乃ちんーゆを人ゆ
乳れゆきバ我を乳ゆ金銀の入ほゆ乳ゆ
バ指麦ゆや二指麦ゆハ何賣ゆを乳ゆ
紙ほて何ゆて何ゆ世ゆなりゆハを人ゆ我ゆの世
なゆを稲乃神の守ゆと行ゆゆ人ゆべーといよ

く家業を大切に勤め先祖ハ七ツあと起て門を
掃き水をうち金ぐくを見めぐり吉方を腹帯
をうけて男ぶりのよいまじりと主従ハ屋ざてな
く身を引下げて家業を受わ夢の内ハつ以
をなく窓あり立きあるとハ外よりゆざつく
見へて法事くハ外接淫くハ後ぞうくあり
けり明日未明ハ門をたきけるあり行者の
先ハうりく射ーたる体を丁度拾ひ上げくハ
書を見れバ右の高人より京ハ高人に面
をいひきたとうへて事ハ五大力井ーとして刈

付付ハ刈ーさざあて大事乃体なるを刈ーのけゞ
ハて都ーさあくれ屋ーたるまてゞ和くと新
後を見れゞを人新を見へびまてゞを見よ
新くうへをなゞをれバ先ーまるハ京の平ハあれ
ゞを口ざくへをこーらへのせてを寄ーをれしよ
しや高へひいきあくれ先ゞと行ハ周ハ高ハ思ひ
へきはみまて身命をうけたる大事まてをあゞ
まゞ四ハ西ハあゞ新の事を寄きゞと刈四
てへけきバ四ハ後人名ハあなさきけゞ
ハて後へは四ハ和立ゞハるとハ凡たい



のおハ出ぬ内ねうしらいろおハ出ぬ二ツ
ざる方のり新年ゝ丸あんぐ乗船を付立ち
遣ーじいけ出ぬ辰の刻までよ新ゝ
けバ喜ゝえ出てだちん振一枚出ぬ一ツ
大坂ものーつの下刻ゝ書けるハ長ハ出ぬ
大宮穀和どうやふ飛ぐゝーこらゝ高ひあり
さのゝ出ぬ大坂のはゆ乃お猪をきゝのなさなし
あしすび今月の大坂のさゝぐを出て明ゝる夷
笑の猪魚を付らぶれバ笑ゝ人お猪をれれ
ハ長ゝ出てゝお猪をこゝる夷笑ゝりゝ月ゝいゝゝ

金子一歩あるひハ高或ハ千二千一て売ることあり
うりをまた者の儀ハ何ほどにて七ト云重宛
和泉屋付ハ者の儀ハ何ほどにて七ト云重宛
お播肥後ゞ方ハ千二百ト一なきハ曰ト云重分又
又ハ三ト云重ほどなきハ曰ト云重分又
海人ハ五分五厘ほ宮ひ指ヲハ金弐百文
ハ二ト云毎のお金を出ち播ハて宿へ持帰ル重ハ三目
又ハ海のさくびひごゞ二百ト一なきハ其ほ
と宮ゝ人後一ト一きハ宮ゝ人後一て宿へ指
まゝの儀を乳ほ紙れ書けいさ重一さ付ハ

物ゝのもとをかんゞくてさのあの方海のお播ハ二百
ト一なきものを二百七ハ分ハ宮宮ほ宮ほ事をあり
みハゝを考へて曰ハ二ト一ほ宮事をあり
と宮宮すゝ人ハ大坂問屋といひ合せ仲ハ
乳つけいさを考ほ事きれ書宮ゝ二百けきゞ
宮ゝふ宮ゝほゞれけきハゝ百ほ宮ゝ宮ほゞ
けきハ宮ゝふ四ゝ二ト一と和泉付ほ二百ト一のお播
ゞ宮ゝほゞちなれゞ二百ト一を宮ゝ宮ほゞちな
れハ曰ほ百ト一なる義今日ほ宮ゝ明ほれお播を二百
付ハ金紙をつゝみ乳ゆほゝ事なきゞを紙ゝ

されバあるひハそれみハまんなかふうろ事ををりく
けをあをんをつ宮くしゝ姫ゝ仏ひ人をまたる林
なるとさてハ方のあるくこ宝び蔵ゆ様ゆ　して
四へをいりれ

大張を拾ふあさ起の徳

目鳴よ拾ふる四へ水をとりけバ掛ふるとはやく千の
剛乃うへあハ面をたるあるくゝいあへ品たるつが
源へ物高武具袴文を麦ゞひあせ　時ハ四ど
おを米彩をへゆりうるく雲ひかけてハへがれこ
さね四へ高分あ姫をやきゞをさゝ姫よやうとはせう

記銭をへまきて張いるゝひバ四ど姫でゐしあをゝ麦へ
哈つゞひ事れ物ふ四物のついへれゝゝ今様を
たる高麦ほんドやゝゝてきれみあゆせゝひハ大張
ホ茅ゝゝさねけ物を拾ひ是ひゝへホ稲荷乃明
神ゆりさゞけてさゝゝ抓福ゝ歓会ゝてあさ
姫をいそゞ金ゝ三高毒用さゝてあゝ高れ四や
へゆさ姫るの大張乃お福をさけバ姫ハ字カる五ホ
お雲ハ三張五ホ一つゆの要雲をさけバさの文
姫の三面ひゞゆつゝ様なりさそ三分の四ぶう
ゝいをすてひどハ字カる事分いづをハ三張五二ト

の麦買利いづれと言しひご三百と買へハてでもそ
なんぐ拾めさをきらて大阪のきものおはのつも
事を知くあるゝかくのゝくしどう買ハすう
なんと麦くもハすきゝやんで買ハたうふ
めゝ今まで三分四ぶたのあゝたう麦買すす
こーはるふ拾くゝこうてみるセハトあるあ指ゑまで
よなまきバかるとトみくゝひご三百と三指ゑ三分
にして西雲三百しゝう麦を三百買を三百やす
うゝてゝうゝ麦ハまバゝこをもりてをに藤計を
のきんゝてゝうゝ利ゝ麦ゝ買ゝのつゝぐゝゝあゝ

麦ハをもゝくゝうゝ敵口藤計をさん用ゝて張九
百ゑ分利ゝ三張ゑゝの前指ゑ麦をゝてゝせバ
前ゑ水拾びさ毎くゝ拾ちきゝゝまゝく明日
出ゑてゝをゝトのゝトせバ品麦をつゝをゝする毎ゝたゝと
拾び拾ゝ音さい毎をゝをゝてゝあい指を九ゑ拾びバ
あんゝのゝくゝゝ大阪あゝのゝあはゝ拾ゝ今日ゝて
元亨釈書ゝ麦ゝゝ拾ゝゝあはゝ拾ゝ同ゑのゝゝトト
麦ゝあはゝ拾ゝあゝと安くゝ買ひゝゝるくゝ麦ハゝゝれハ
麦ゝをゝとれバ買をゝをゝゝゝ三百ゝて千三百のゝ麦拾
ゝゝのゝ金一ゑゝて麦合ゝ三百麦ゝゝ九ゝ二百九

ぐくれて指八貴人のめうけえくるハナ丈夫入くく
たりしさ三月八仲半こうさこうなぐくひらのてさは
ぜんの海なれバいそて日本まつあ面くく海ぶくみを回
ぶくるしーぐ海乃為ぶくすんで春葉よゆだんなく
毎朝あさ都の海まて指ひーみなれバゆだんして
ちまれみを蔵ーー大阪ふろはるくくぶまで夜
通をほ〇祈て海を殺八だらんを治こうれひ
こまくくふりれバとうくおとれくくはぶげくハ暴
風ふせあぐ紀半くくひたび紀一船の
こんはうくまあぶてうされるふんげや

ちあまぐきれバ船ハ一代其の島貴乃ちこハすこーれ
船まて大きなる船ひなう地ぐて高ぶのちい
人ぐ力地を乳垂ーねきバ船の男和を子孫ハ
いよ家ぬあぶくく業たぐこみこの船までそく
くく垂ひをつさ結て船ぐくく船ぐを人ぶ長ぶと
さまこねぶうあて地船をたーうふこて我一こ
やすあまけてそくくあをおうける食なるめぐ
地を貴へハさーー紀でをあぶりあくくりり
こうあいひまて南方紀やこくく船バある長和を
貴ぶくいよ長くるまいこをいひ船ぶきハ陸

分別のたりふいなどをそれをうつてんあるく
目を悔さらで云しつ雲くハ芋ずつうりしゝ芋ず
ゐれうさ云ひてくれ雲よ花を拂ひてを三剣ハ備後
ゞ物ゐるこうくうい作の世れ中しゆて貧なるくれ天
怠のうるしいるのハなーさきゞ呂たうハ仕懸ゞを
やけて天日もやもたれ雲とらくハ今借金不一重乃立
身ゝををうこうてもゝのいろひくれ雲物の揃ハ丸
なるもさらで云ひさくれ来年うくハと思ふもの
さん周の遠ひををさんなるハ仕大福帳不かくれりれ
立身大福帳巻之五